

編集後記

微小胃癌が特集号として企画された時、診断学的な研究論文のほかに、微小癌を通して、胃癌の成り立ちを形態学のみならず背景因子をも加味した組織発生を論じた研究論文を加え、微小胃癌の問題点を浮き彫りにしたいという願いがあった。本号に掲載された論文を読むと、初めの意図はほぼ満たされていると思う。

微小癌とは minute か microscopically かという議論もあったが、結局は 5 mm 以下の大きさのものが論ぜられることになった。鎗田氏らは X 線診断では存在診断であれば 2~3 mm のものまでなら可能性があるといっている。岡崎氏らは微小病変の発見には内視鏡のほうが有利であるとしながらも、従来の内視鏡検査そのものの発想を変えない限り微小胃癌診断の進歩はないと述べている。

微小胃癌といってもいろいろな type がある。私は日頃、微小胃癌の中には肉眼で形態を認識し難いものと、小さくても肉眼ではっきり判るもの、あるいは小さいがすでに深達度が少し深いもの (sm) との 2 つの type のものがあるのではないかと考えていた。前者が微小 II b で後者が微小 II c や II a である。早期胃癌がすべての癌の初期ではない。極めて広い表在癌も早期癌である。こういった発想から生じたものが Super, Pen の考えである。5 mm 以下の大きさのものを集めてみると、真の意味の初期癌の像が集約されるであろうと考えていた。そういった意味で大原氏の臨床病理の論文には同感で、賛意を表したい。また、このような点をも裏付けるための実験微小胃癌の研究も可能であるとする栗原氏ら、松倉氏らの優れた論文には敬意を表するとともに、これらの研究のますますの発展を願うものである。

<古澤元之助>

<編集> 早期胃癌研究会